研 究 結 果 報 告 書

古来漢字漢文を尊重した日本文化の歴史にあって、漢字音の研究は中国文化を摂取し消化していく上で不可欠であった。それは、漢字音の理解が中国文化摂取における最大の手段であることによる。

日本と韓国の両国では、ともに中国韻書を輸入し、改編する中で、同じ漢字文化圏にある隣国同士でありながら、その受容のあり方や内容に重要な相違が生じている。

また、 ある時代には韻書としての形式において一方が他方に影響を与えたことがあるにもかかわらず両国韻書の違いは、両国における韻書の位置付けの違いに基づくだけでなく、両国における儒学や科挙のあり方など、すなわち文化のあり方と密接に関連している。

本研究では、日韓両国の韻書の歴史を考察するため、まず、日韓の韻書の歴史的変遷の大筋をとらえ、その受容のあり方や内容上重要な相違などを中心に両国の中国韻書の受容史を比較対照した。

結果として 韓国の韻書の主な使用目的は漢詩文作成にあり、作詩の基準が『礼部韻略』の韻目であった点であり、朝鮮初期韓国韻書の編纂事業にもっとも影響を及ぼしたのは四声体系を維持した『古今韻会挙要』『洪武正韻』であったことがわかった。

これに対して、日本では、 漢詩文や注釈をするため、あるいは漢字研究、漢字音研究のために『礼部韻略』、『韻府群玉』、『古今韻会挙要』が五山版で刊行されて広く使われている。その中で『古今韻会挙要』が群を抜いて多く用いられていることが注目される。『古今韻会挙要』を最もよく利用した理由は、字音については反切だけでなく七音清濁まで明示されていること、つまり字音と意味との関係の詳細まで述べられていて、漢字音研究用の韻書として利用しやすかったこと、また掲出字については、それぞれにしかるべき引用文献からの注文が引かれているので、韻書としてもきわめて利用しやすかったことなどにあると考えられる。

日韓両国における韻書の歴史を顧みると、両国韻書の比較研究は、 両国韻書史の比較研究にとどまらず、両国の漢字文化史や両国言語史などの比較対照研究にも及ぶものである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等) 文化史的観点からの日韓中世漢字音研究の対照的研究 李承英 韓国日本研究団体 国際学術大会 2014年2月予定
論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)
書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)